

介入研究をどう進めるか

EBP(evidence based practice)の確立がめざされる中、まず本誌 49 巻 3 号ではシステマティックレビューについて取り上げました。本号では、介入研究について考えます。EBP の機運の一層の高まりと、それに伴う「アウトカム」創出の重要性から、現在、介入研究へのニーズと期待は非常に大きくなっているといえます。そしてそれは同時に、看護研究における「エビデンス」とは何かを考える契機でもあると思われます。

そこで本特集では、あらためていま、介入研究をどのように進めていくべきか、そしてどのような介入研究が求められているかを考えながら、今後の展望を探っていききたいと思います。

冒頭では、介入研究のこれまでとこれからを概観しながら、介入研究の最新のトレンドを探っていきます。その上で、本年 6 月に行なわれた、公益社団法人日本看護科学学会主催 JANS セミナー「介入研究ことはじめ—デザインと実施」を参照しながら、介入研究を進めていく上でのポイントと、そのためのマネジメントをどう行なっていくかについて考え、それが具体的な研究としてどう結実しているかを、研究事例としてみていきます。そして最後に、研究を支える基盤・リソースとしての取り組みを紹介します。このような多角的な視点から、本特集は構成されています。介入研究のさらなる発展に向けた一助となれば幸いです。

企画：『看護研究』編集室